

ひびきの声 上田 藤市郎

人間の生命や経済活動、移動に大きな行動変容をもたらす感染症に世界各国が取り組む中で新しい年を迎えた。各国の政治、医療、福祉の状況が報道されて、この難関への現状が見えやすくなった。さらに各国が政治体制や主義主張の違いを越えて協力し支援しあう必要性が高まった。人類の共存共栄が再認識される事態である。

かつて、カルカッタのマザーテレサ修道女は、「愛の反意語は憎しみではなく、無関心なのだ」と明言された。他国の人々が貧困、飢餓、虐待の窮境にあるとき、異を唱えたり支援しようとする声に対して「内政干渉」として拒否する国がある。我々は要らぬお節介をやめて放置すべきなのだろうか。

藤樹先生が求めた孟子の教えに人が生まれながらに持っている四つの心（四端）、「かわいそうに思う心、悪を憎む心、控えめの心、物事の是非を見きわめる心」がある。我々は、人によってその強弱はあるものの、本来見て見ぬふりができないのである。放っておけない気持ちをもって。陽明学では、この気持ちを実行に移すことが大切とされるが、実践にはまた様々な困難が予想される。身の危険が及ぶこともある。しかし、「無理をせず、他の人々と力を合わせて自分にできることからやりなさい。」が、先生の声だろう。

『藤樹先生の孝について』 ～ユーチューブ発信の経緯など～

学習委員会 保木 隆

高島藤樹会は、「温かくて深い、近江聖人中江藤樹の「孝」の思想を高島から全滋賀へ、全国へ、全世界へ広める」をビジョンに、六つの委員会に分かれ顕彰へ取り組みを進めています。誌面をお借りして、この度ユーチューブのアップに至った学習委員会の取り組みを紹介します。

学習委員会は藤樹人間学塾が主立った活動で、これまで『翁問答』や藤樹先生の原著を京都大学の西晋一郎先生が通釈された『孝経啓蒙』、『中庸解』等と読み進めてきました、そのことが今回の取り組みの素地になりました。

その西先生の短編「中江藤樹の学徳」の中に、以下の記述があります。

「藤樹先生は純粹無雜の君子人、成育過程で自然に徳を備えた人、其影響感化の力は最も普遍的で動かされざるものはない。また、藤樹先生の孝の説は『我が国道德の絶対的真理』である。太虚とか未発とか寂然不動とかの言葉で指示された孝は、一面慈愛、一面知恵として現れる旨を簡明に説いているいわば孝の三位一体の説示である。」と。

私の理解の範疇を超えている藤樹先生の「孝」についての端的な論述

であります。SNSを使って、これを誰にでも伝わり易い形で少しでも紹介出来ないかというのが、学習委員会のいわば命題でした。

そこで、「孝」を直接取り上げるのではなく、そこに至る道程を少年期、青年期、帰郷後小川村での学問への情熱、生き方の紹介を入れその経過の中で「孝」を起承転結の四部構成で浮かび上がらせるように考えました。

学習委員会は、定例の理事会時と二回程度人間学塾の後に設け、方針、発信内容と方法について協議を重ねました。ようやく令和三年春頃には素案ができ、発信原稿の作成と分担、参考図書等を決めました。委員それぞれが仕事、用務をかかえていましたが、何とか草稿を五月末頃に仕上げることが出来ました。委員には大津市在住の方もおられ、遠方にもかかわらず精力的に取り組んでいただきました。

参考図書としては、上記の著作と



松下亀太郎先生執筆の『物語 中江藤樹』、城島明彦訳の藤樹先生『翁問答』、中江藤樹記念館編『中江藤樹入門』を活用しました。



孝経石碑

特に、『物語 中江藤樹』は藤樹先生の生涯を生き生きと描いてあることで役立ちました。

しかし、コロナ第五波等で委員が出会えず、夏季は原稿の手直し、発表練習を各自で行い、撮影は秋にずれ込みました。カメラに慣れない身ですので予行演習を経て、本番は十月半ばに何と五時間を要しました。発声指導、撮影、編集、映像化に企画広報部の深川様には大変お世話になりました。

内容的にあくまでも市民手作りのもので学術的な批判に耐えるものはありませんが、藤樹先生の考え、学問へのひたむきさ、孝の思想の概観は表せたのではないかと思っております。各委員が真剣に取り組みましたが、内容、表現等反省点も多々ござんをお願ひします。本会のHPからユーチューブへアクセス出来ますので、是非視聴いただき改善点等をお教えいただけますと幸いです。

中江藤樹先生が精神的な支柱となり本市が「おもいやりのあるまち」として、先ず県下や全国に知れ渡るよう、今後も微力ながら尽力していきたいと思ひます。